

山梨県北巨摩郡須玉町

平 山 遺 跡  
HIRAYAMA SITE

田園空間整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003  
須玉町教育委員会

山梨県北巨摩郡須玉町

**平山遺跡  
HIRAYAMA SITE**

田園空間整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

須玉町教育委員会



平山全体 (A区 B区 C区)

## 序

本報告書は、須卡町山園空間整備事業に伴い、平成14年度に発掘調査された平山遺跡について、その成果をまとめたものです。須卡町では岐北地域振興局農務部より須玉町教育委員会が委託を受け発掘調査を実施しました。検出された遺構は縄文時代後葉の住居址1、中期末の住居址6と石凹炉1、竪穴遺構2、石列1、屋外集石炉1、のほか土坑とそれに伴う埋葬など貴重な文化遺産であります。昭和47年津金御所前遺跡が発掘調査されて以来、30年余続く遺跡の中で屋外集石炉の発見は町内では初見であり古代の生活様式を考える上での貴重な資料の発見を悦ぶものであります。御協力を賜りました関係者各位、並びに直接発掘調査に当たられました皆様に改めて厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

須玉町教育委員会  
教育長 藤巻宣夫

## 例　言

1. 本報告書は、田園空間整備事業に伴って発掘調査した山梨県北巨摩郡須玉町江草5921番地ほかに所在する平山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、須玉町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. <発掘調査組織>  
調査主体　須玉町教育委員会　教育長　藤巻宣夫  
調査担当　須玉町教育委員会　山路恭之助  
調査委員　深沢裕三  
調査補助員  
浅川英光　角井保之助　伏見徳芳　深沢照明　深沢直江　宮崎夏子　白倉恵美子  
石川モト子　小澤久恵　八巻まさ子　中込艶子　小尾嘉子　向井直子　斎藤知  
吉村光江  
整理員  
松林新・高橋正明　斎藤知　丸山高弘　石井力　高橋香精　市川道夫　植口均  
岡本美恵子　市川博子　小尾裕美子　浅川佐知子　土屋文美　三井ちぐさ　吉村光江  
4. 本書の執筆・編集　山路恭之助　深沢裕三　DTP編集　浅川佐知子  
5. 本調査の出土品、諸記録は須玉町教育委員会が保管している。  
6. 株式会社シン技術コンサルトに写真測量・図化を委託した。  
7. 本書の作成及び発掘調査にあたり、下記の方々よりご指導ご教示を賜った。  
ご芳名を記して感謝の意としたい。  
新津健（県埋蔵文化財センター）

## 凡　例

1. 本書で用いた地図は、国土交通省国土地理院の数値200,000（甲府1/200,000 平成9年7月発行）及び、数値地図25,000（若狭1/25,000 平成9年10月1日発行）である。
2. 実測図の土器、陶器断面が黒塗りは須恵器、それ以外の白抜きは土器、土師器などである。
3. 遺構及び遺物の挿図中の縮尺は下記のとおりである。  
遺構全体図 1/400　遺物実測図　土器 1/1 1/2 1/4 1/8　石器 1/1
4. 遺構及び遺物写真図版の縮尺は、統一されていない。

## 目 次

### 巻頭図版

序

例言

目次

第1章 調査に至る経緯と経過.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	2
第3章 遺構と遺物.....	5
(1) A区.....	5
(2) B区.....	5
(3) C区.....	7
まとめ.....	10

### 挿図目次

第1図 遺跡位置図.....	2
第2図 周辺の遺跡.....	3
第3図 遺跡詳細図.....	4
第4図 A区全体図.....	11
第5図 B区全体図.....	12
第6図 C区全体図.....	13
第7図 A区竪穴遺構・B区1号住居址・2号住居址.....	14
第8図 3号住居址・8号住居址.....	15
第9図 B区土坑内出土土器1・2　C区住居外縄.....	16
第10図 A区工房跡出土遺物.....	17
第11図 A区竪穴遺構・B区1号住居址～3号住居址出土遺物.....	18
第12図 B区土坑内出土土器.....	19
第13図 C区4号住居址山上遺物.....	20
第14図 C区4号住居址・5号住居址山上遺物.....	21
第15図 C区5号住居址～7号住居址出土遺物.....	22
第16図 C区8号住居址・住居址外出土遺物.....	23

### 表目次

表1 A区～C区上器観察表.....	24
表2 A区～C区石器観察表.....	25

### 図版目次

図版1 A区全体　B区全体　C区全体	
図版2 A区工房跡　A区竪穴遺構　A区石列遺構	

- 図版 3 ..... B 区 1 号住居址 B 区屋外集石炉<sup>1</sup> B 区 3 号住居址脇より石調炉
- 図版 4 ..... B 区土坑内出土十器 1 B 区土坑内出土土器 2 C 区 4 号住居址
- 図版 5 ..... C 区 4 号住居址より土器山上 C 区 5 号住居址 C 区 5 号住居址より土器出土
- 図版 6 ..... C 区 7 号住居址脇より埋藏出土 C 区 6 号・7 号住居址 C 区 8 号住居址
- 図版 7 ..... A 区工跡・竪穴道構山上遺物
- 図版 8 ..... B 区 1 号住居址～3 号住居址出土十遺物
- 図版 9 ..... B 区上坑内出土遺物
- 図版 10 ..... C 区 4 号住居址出土遺物
- 図版 11 ..... C 区 4 号住居址・5 号住居址出土遺物
- 図版 12 ..... C 区 6 号住居址～8 号住居址・住居外出土遺物
- 図版 13 ..... C 区住居址外出土遺物

## 第1章 調査に至る経緯と経過

本遺跡の調査は、田園空間利用整備事業に伴い岐北地域振興局農務部より須玉町教育委員会が委託を受け、平成14年4月1日協定書を交わした。試掘調査は、平成13年11月5日に始まり12月14日に終了した。調査対象地域は、塩川右岸の江草集落の東側にあって、左岸の根古屋地内から獅子吼城へ通ずる林道を登り、通称机山の麓、江草5921番地ほかの田と畠約50,000m<sup>2</sup>で標高が780m～800mが測られる。一部の田を除き殆どの田や畠は、10年以上も休耕状態であったために荒れ放題で、桑、桐、胡桃の木は直径20cm近くに育ち、萱は天を仰ぎ、その根株は1m以上にも繁茂し、ところどころにある水たまりは、猪のぬた場となっていた。須玉町小尾の有井林業が重機とチェーンソーで樹木を伐採した後、チップ状態に粉碎した。雑木林化した田や畠、ぬた場の田、急斜面に細かく造成された棚田と机山からの土石流によって運ばれてきた巨石を伴う斜面の棚田等は避け、試掘調査をもとに比較的平坦で広めの田と緩傾斜面の畠を対象とし、本調査面積を約24,000m<sup>2</sup>に較ることとした。机山の山裾で、湯戸ノ沢の尾根沿い北側一帯の棚田をA区、その南側の緩斜面にある畠と平坦な棚田をB区、調査区域中央部から北西寄りの斜面に作られた棚田一帯をC区とした。

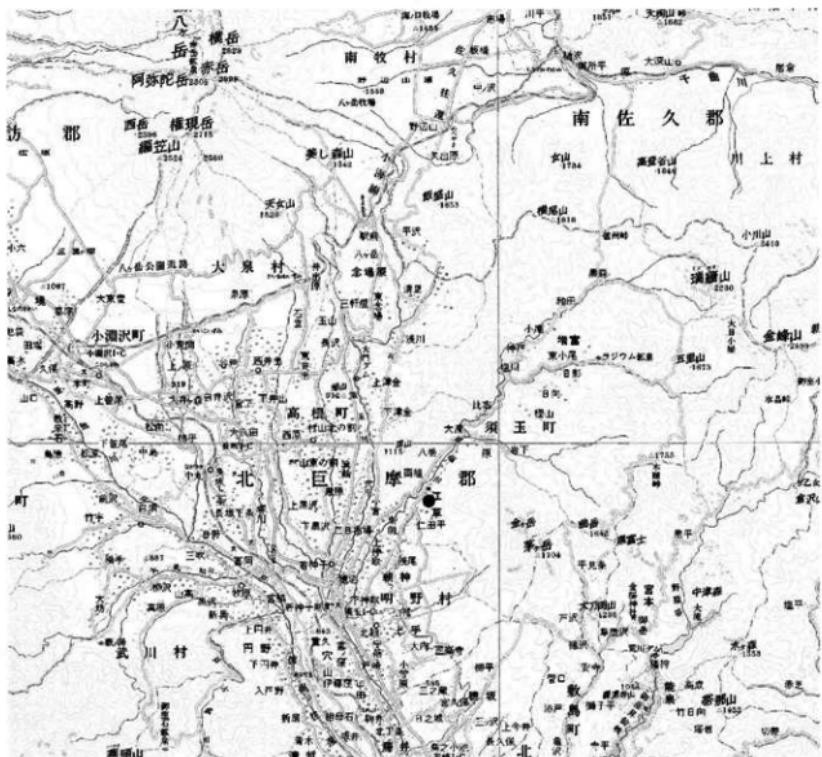
本調査は、平成14年2月21日に始まり11月1日に終了した。調査の結果、縄文時代中期末の住居址6、同時期の石窯炉1、縄文時代後期住居址1、四圓に柱穴を伴う竪穴遺構1、遺構内に柱穴9ヶを穿った竪穴遺構1、溝1条、屋外集石炉1、埋甕と埋設土器等が検出された。



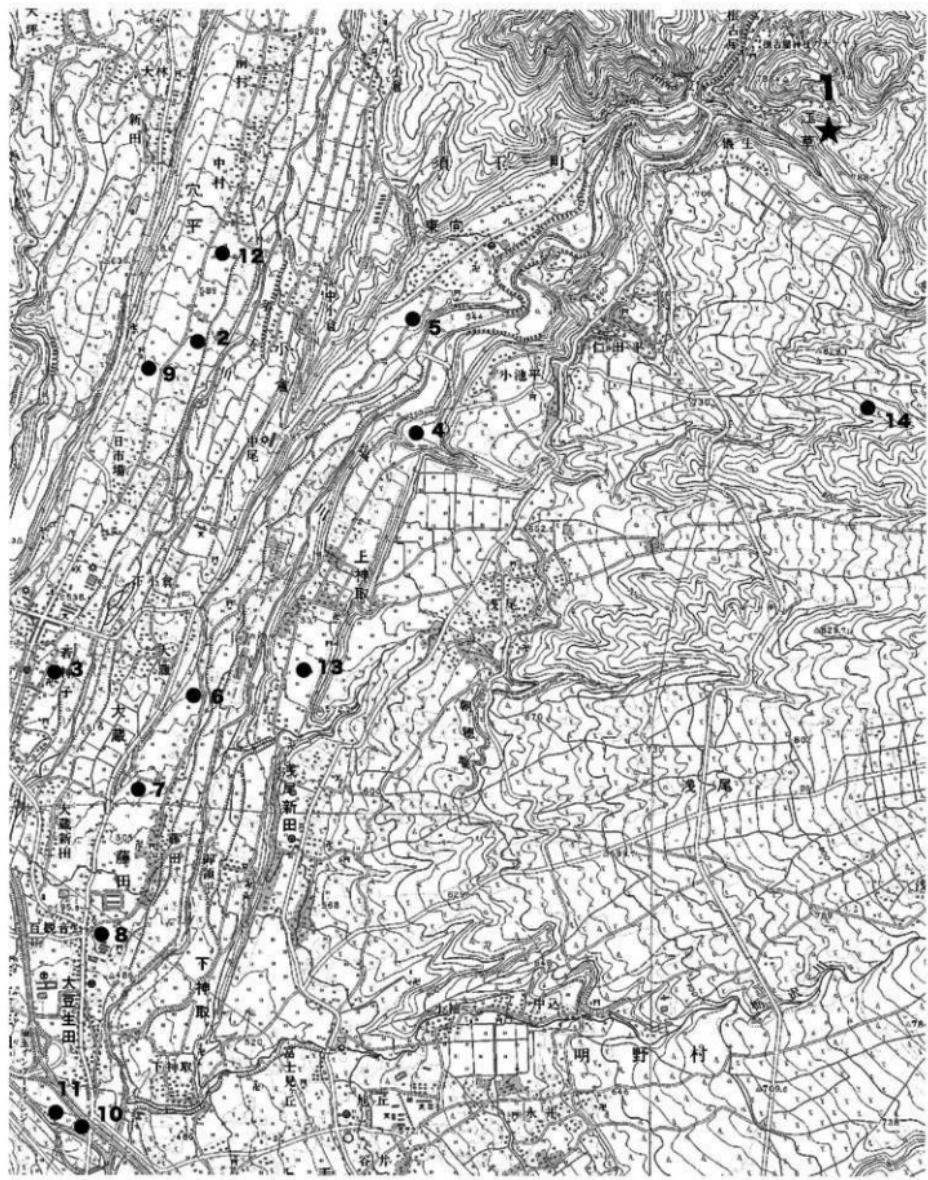
机山を背に平山遺跡発掘風景

## 第2章 遺跡の立地と環境

調査地域は、長野県の川上村を結ぶ信州峠へ通ずる小尾街道の古道が平山の山裾を走る。根古屋神社の西の集落、湯戸から調査区域へ通ずる林道を登りきった辻には、安山岩に三尊の梵字を陰刻した板碑が老松の下に佇む。平山を背に見下ろせば中世の山城、獅子吼城がある。江草兵庫助信康が築城したとも言われ、天正10年6月本能寺の変で信長が世を去った後、北条氏と徳川氏が旧武田領をめぐって戦った天正壬午の乱の際、旧武田臣の津金衆と小尾衆の協力を得て徳川方が陥した城といわれる。何時の頃か行者が即身成仏した塚三基が山頂にあると古老が言う行人山が、獅子吼城北側の調査地域の真北に聳える。獅子吼城を左に見て林道を下れば塩川左岸の集落、根古屋と湯戸があり、右岸には佐久往還が国境の信州峠へ向かって走る。往還沿いには、中尾城から始まって大渡の烽火台、比志の城山、前の山の烽火台、神戸の烽火台等、中世の山城が信州峠まで続く。地元の古老の話では、このあたり一帯の開墾は約400年前にさかのぼるという。調査区南端の急崖に佇めば、塩川沿いに佐久往還を疾走する騎馬武者の雄姿が想われる立地である。

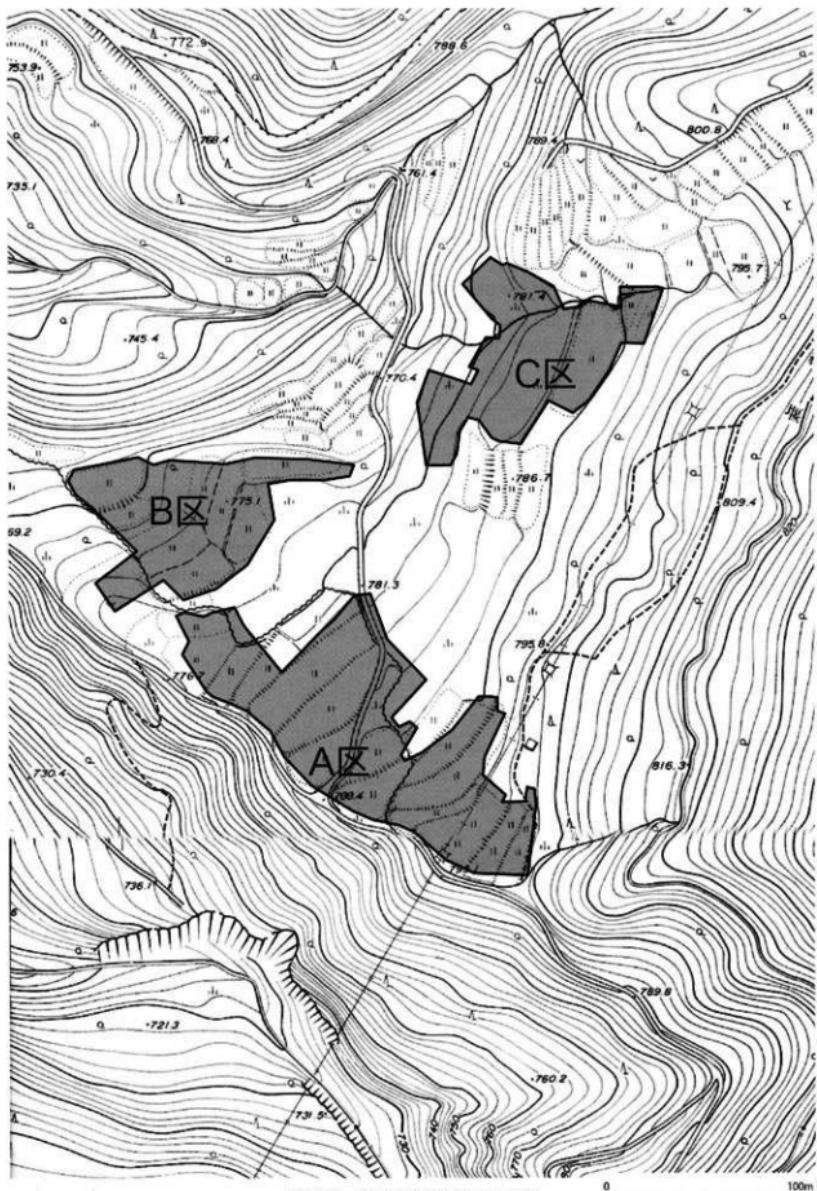


第1図 遺跡位置図(1/200,000)



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

1. 平山遺跡
2. 蟹板遺跡
3. 御崎前遺跡
4. 下平遺跡
5. 大木田遺跡
6. 塚田遺跡
7. 滝下遺跡
8. 腰巻・腰巻北遺跡
9. 宮田・笠張遺跡
10. 多屋前遺跡
11. 大豆生田遺跡
12. 飯米遺跡
13. 寺前遺跡
14. 上の原遺跡



第3図 遺跡詳細図（1/2,500）

## 第3章 遺構と遺物

### (1) A区

#### 石鐵工房跡（第4図 図版2・7）

調査区内で最も高い場所（標高795m～796m）に位置する遺構である。東西5m×南北10mの範囲内から、野外工房における作業台として据え置かれたと思われる扁平で不整形（65cm×80cm）の安山岩を中心にして、有茎石鐵、無茎石鐵の完型や一部欠損した石鐵、核粒状黒曜石、三角形の右隕形フレイク、石錐等、120点余が出土した。工房跡とその周辺は、人頭大或はそれ以上の礫が露出しており、礫間に住居址に伴う施設や柱穴、焼土などは検出されていない。石鐵が出土した包含層は8cm～12cmが測られ、暗褐色土層で地川は比較的サラサラした黄褐色土である。

#### 出土遺物（第10図 図版2）

出土した石鐵は弱い折りの凹基或は平基が多く、無茎（1・2・3・4・5）で石鐵の長軸1.5cm～2.4cmが測られる。有茎では（6・7）があり、錐（8）、剥片（9・10）も出土している。山梨県内では、縄文時代前期後葉から中期初頭にかけ石器組成における石鐵の比率が非常に高くなるが、中期中葉から後葉にかけ極端に低下し、後期に入ると増加に転じるという（伊藤1999）（註1）これらから工房跡及び遺物は、縄文時代後期初頭と云えよう。他に敲石、磨石なども出土している。

#### 竪穴遺構他（第4・7図 図版2）

多量の石鐵が出土した田から3枚下の棚田（標高790m）から検出された遺構である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸210cm、短軸200cm、壁高は20cm～25cmで、壁溝・柱穴・カマド等は見当たらない。やや凹凸気味の床面は、粘性的黄褐色土である。住居址の四隅から遺構に伴うものと思われる柱穴5が検出されている。遺構の南東隅のピットに接して、直径65cm深さ25cmの上坑が検出された。周辺のグリッド内から3基の集石上坑と7基の土坑、そして直径30cm～40cmで深さ15cm～25cmのピット12ヶが検出されたが掘立柱建物の柱穴とは考え難い。

#### 出土遺物（第11図 図版2・7）

竪穴遺構から北東15m entferntで出土した埋甕は口縁を欠失しているが、口縁部が内弯する腹形の上器（1）と思われる。文様は二段に構成されている。上段には2条の波状隆帯が貼付され下段にシダ状沈線文が5条垂下し、その間に5条の沈線による蛇行懸垂文が施されている。胴部全体は横位沈線文が施されている。現存高は約19cm。縄文時代中期末、曾利II式であろう。

#### 石列（第4図 図版2）

竪穴遺構が検出された田から4m低い田のほぼ中火を東西に横切る石列で溝幅は東側で30cmで西へ徐々に広がり末端で80cm、全長は24mを測る。東側の石列は扁平或は角状の安山岩が並び、中間で約2m余り石列は消える。冉び割り石含む礫と小石が末端まで続く。暗渠でもなく性格不明。

### (2) B区

#### 1号住居址（第5・7図 図版3）

B区の西側、尾根の背から緩く北に傾斜する台地上に構築されている。北壁と東壁の一部が耕作によって削平され欠失しているものの、平面形は約3.5mの隅丸方形が想定される。標高は770m、覆土はやや暗い黄褐色土で、壁高は西側で約20cm、南側で10cm～20cmが測られる。床は全面に貼り床が認

められ、床直から不整形な半円2と角柱状の石1が検出されている。住居中央よりやや北東寄りの浅い掘り方から、30cm四方の方形石圓炉の一部が3つに割れた炉石と炉体上器が正位で埋設されていた。周溝は認められなかったが、炉を囲むように柱穴が5ヶ確認された。直径20cm～25cm・深さは12cm～15cmが3ヶ、やや楕円で、35cm～40cm・深さ12cm～17cmが2ヶである。

#### 出土遺物（第11図 図版8）

波状口縁深鉢の口縁部（1）が現存幅20.6cmを測り、口縁部文様は沈線による渦巻文と円文を交互に配置している。住居内で東南のコーナーに近い柱穴から浅鉢（2）が出土した。波状口縁を呈し口縁には連続する円形文を配し、現存高は8.1cmで縄文時代中期末の曾利III式に比定できよう。他には無文の鉢（3）が出土。その他に床直から八角形を呈し、中央部に向ってややくぼみをもち側面に底面が見られる石器が出土した。

#### 2号住居址（第5・7図）

1号住居址から北東に位置し、5枚ある柵田の一枚から発見された住居址である。推定で東西5.5m、南北6mの楕円形のプランを持つものと考えられる。黄褐色のロームを主体とし、覆土は残存しない。床面は特に硬化していない。基本となる柱穴は9ヶであろう。石圓炉北側の長軸60cm・短軸52cm・深さ30cm程の楕円形のプランを持つ土坑は、2号住で作る施設と思われる。検山された石圓炉は、一部が50cmで南側の炉石が消滅しており炉内の焼土は認められない。

#### 出土遺物（第11図 図版8）

試掘の際、堀之内式土器片が試掘坑から出土しており、本調査でも磨消縄文の土器片が細片ながら山上。縄文を地文とし、沈線による蛇行懸垂文片（1）、蕨手文と見られる薄手上器片（2）のほか、平行沈線を施した薄手の精製土器片等が出土している。縄文時代後期初頭の遺構と思われる。無文帯の口縁をもつ縄文時代中期末の曾利式深鉢片が一点出土している。

#### 3号住居址（第5・8図 図版3）

この住居址は、2号住居址から10m北へ距てて、板状の石を方形に組み合わせた石圓炉を持ち、柱穴の配置から直径5m～6mの円形プランを持つ規模の住居址と推測される。2号住居址と同様にローム主体の黄褐色土を床面とし、全体に硬化しているが覆土はない。柱穴は14ヶ認められ殆どが直径30cm、深さ20cm～40cmと幅がある。石圓炉は55cm×65cmの方形石圓炉である。板状の炉石は被熱によって東側の炉石1枚を残して全て細かく割れ、北側と西側の炉石は正位置からずれていた。炉内は10cm黄褐色土が堆積しており、燧土粒子と炭化物がわずかながら認められた。石圓炉から東へ5m距てた位置に直径80cmで深さ約15cmの舟底形の土坑と、住居址の北西隅に直径40cmと60cmの土坑2基が認められた。深さは共に40cm前後が測られる。

#### 出土遺物（第11図 図版8）

住居内の北東隅に3ヶの柱穴があり、そのやや巾央あたりから口縁部を欠失した小型深鉢が出土している。深鉢胴部に櫛齒状工具による条線文を施したもの（1）、地文の縄文に沈線による蛇行懸垂文を施した深鉢片（2）、縦に沈線を施した深鉢の頸部片（3）、櫛齒状工具による条線文と沈線による蛇行懸垂文を施した小片（4）、唐草文の区画内に縦の沈線を施した深鉢片、矢羽状沈線文の深鉢片等がある。有茎部を欠損した櫛齒状石鐵と無茎部の方を欠いた石鐵（共に小形）も出土している。縄文時代中期末の遺構と考えられる。

#### 2号住、3号住居址周辺の遺構

#### 屋外集石場（第5図 図版3）

斜は90cm×100cmの楕円形、深さは55cmの摺鉢状である。上層は直径が10cmから15cmほどの砾

と拳大的礫が敷き詰められ、円周には幅15cm～30cm・長さ30cm～40cm・厚さ10cm～15cmの不整形な板状礫を直立させ、内側には同様の礫と小石が詰まり、その隙間に炭化物を含む黒色土が認められた。底にも礫が敷かれていて礫の間には炭化材が遺存していた。集石炉の南側に直立する礫は最も大きく、長さ60cm・幅45cm・厚さ10cmの板状礫である。礫の外側は平坦で内側はややふくらみを持ち、両面とも焼成を受けていて、内側の面には炭化材が附着していた。この板状の礫が火焚きの焚き口を塞ぐ石として使用したものと推測される。炉内から遺物は見当たらなかった。竪穴住居を伴わない集石炉は、夏期を中心とした調理形態である可能性があり、土器を用いない調理方法が夏期を中心に存在していたことが予想される。周囲に居住痕跡を残さない居住形態であったかも知れない。(註2) 集石炉の北側と南側から、巨大石門炉と縦位条線文を施した深鉢が出上しているところから、時期は縄文時代中期後半と考えたい。町内では初見であるが、高根町西原遺跡(村山西割、雨宮1987)、社口遺跡(村山北割、東割、柳原1997)他、長野、静岡、東京にその例を見ることができる。

#### 住居址を伴わない石圓炉(第5図 図版3)

集石炉から約6m北東の緩傾斜面上から発見された石圓炉である。規模は一辺が約1mの方形を呈し、北側と南側の炉石は角柱状で比較的厚みが少なく浅く並んでいる。東西の炉石は、厚さは10cmほどで幅が60cm～80cmと広く、板状の炉石で底から外傾する。炉内はしまりのある黄褐色土が20cm堆積し、次いで4cm～5cmの赤色焼土が層をつくる。住居に伴う柱穴や埋設土器などは検出されていない。炉の形態は曾利III式～V式に当るものと考えられる。(註3) 規模や形状などから、縄文時代中期末の石圓炉である。

#### 土坑内出土上土器1(第9-1・12-1図・図版4)

屋外集石炉から約5m南に距てて、直径50cmの円形土坑から口縁部欠失し、胴部下半の深鉢が正位埋設されていた。胴部文様は櫛状工具による条線と、粘土紐による蛇行隆線がわずかに遺存する。曾利III式であろう。

#### 土坑内出土土器2(第9-2・12-2図・図版4)

3号住居址の北東6m～7mの位置に、直径約65cmの円形土坑内から横臥状で出土したキャリバー形を呈する深鉢である。口縁部が4単位の波状をなし、この部分に渦巻文を配し、胴部の文様は垂下する隆帶と渦巻文で4単位に区画され、区画内は沈線による蛇行懸垂文と窓状工具による綾杉状の文様が施されている。曾利III式に当るだろう。

#### 3号住居址周辺から出土した石器

3号住居址北西隅のグリッドから磨石1と両刃部が欠けている短冊形小型磨製石斧(長さ5.7cm・幅1.7cm)が出土している。3号住居址西側の一段低いグリッドから短冊型打製石斧(長さ11.7cm・幅5.0cm)と、3号住居址北側の土坑内からは基部を欠損した打製石斧が出土している。

### (3) C区

検出された遺構は、C区北隅の二枚の小さな棚田で耕作土を除去した後、厚い黒色堆積土の下から、4号、5号、6号、7号の順に検出された遺構である。標高は790m前後が測られる。4号住居址から南西へ約40mの位置から隅丸方形のプランを呈する竪穴遺構を検出し、8号住居址としたが遺構内から柱穴9ヶのほかは住居に伴う施設は発見されなかった。

#### 4号住居址（第6図 図版4）

4号住居址が検出されたグリッド内の鋸歯状の壁による精査中に、黒褐色土内から籠口文を施した、やや小ぶりな深鉢（図版5）が横臥状で出土した。次いで石窯炉の一部が露出するに至り、住居址の存在を確認した。プランは当初不明確だったが、黄褐色土の堅い床面まで掘り下げた結果、柱穴8ヶと石窯炉2基を検出した。石窯炉の一基は柱穴のやや中央にあって安山岩の平石で構築された1m×1mの規模の方形石窯炉である。他の一基は方形石窯炉から南へ1m距てて出土した炉で、U字状に安山岩平石を配置し、1m×1.2mの規模の石窯埋藏炉（図版4）である。柱穴の配置から推定して円形プランを呈し5.5m～6mの規模と思われる。

#### 出土遺物（第13・14図 図版10・11）

平山遺跡から検出された遺構の内、最も遺物の山上量の多い遺構であった。精査中に横臥状で出土した小ぶりの深鉢（5）は胸部が球状に張り頸部がくびれ口縁部が外反しながら上半で内寄り而在り近い器形で底部を欠いている。文様は口縁部と胸部に分かれ口縁部には斜状沈線文の上にソーメン状隆帯が貼付されている。胸部の地文は櫛齒状工具による沈線文で、垂下する隆帯によって3区画され、区画内には4本の隆帯による蛇行懸垂文が施文されている。U字状石窯炉内埋設上器（6）は深鉢の胸部を利用している。地文は繩文で、頸部に粘土紐による波状貼付文を配し、胸部に隆帯による蛇行懸垂文が貼付されている。（1）は4号住居の南端から出土したX字状把手が付く深鉢片である。大きく外反する無文部の口縁部と底部を欠いている。（2）は籠口文の小ぶりの深鉢（図版5）と同じように胸部が球状に張り、半截竹管工具による平行沈線で施文し、円形隆帯で3区画され区画内には蛇行隆帯が垂下する深鉢である。外反する口縁部は無文で底部を欠く。（4）は頸部から口縁部を欠く深鉢で、沈線による連続孤文が施文されている。（7）は胸部が球状に張り、欠落しているが橋状把手が付いていたものと思われる。地文は繩文で底部に網代痕が鮮やかである。

（8）は深鉢の胸部のみが出土した。半截竹管工具による3本の隆線で4区画し地文は無文である。なお、4号住居北側から黒曜石の有茎石鏃と、黒曜石で最大幅4.2cm・長軸5.6cm・厚さ1.7cmの剥片石器が出土している。時期は繩文時代中期末・曾利II式であろう。他に無文の浅鉢（3）が出土している。

#### 5号住居址（第6図 図版6）

C区の棚田の最上部に占地し、プランは不鮮明ながら机川の山麓（崖）の奥へ遺構が広がるものと考えられる。住居址に伴う付属設備は調査外（崖の奥）にあると思われる。床の硬化面は認められないが、ややしまりがある。床面の南側は二段目の棚田造成によって削平され、東側も土どめのための右垣構築による搅乱が著しい。

#### 出土遺物（第15図 図版11）

（1）は深鉢で地文が繩文である。（2）は口縁部が外反し頸部がくびれる深鉢である。口唇に5単位のシダ状沈線文を配し、頸部に2本の沈線が巡り胸部は沈線による連続孤文で5つに区画し沈線の蛇行懸垂文が5本施文されている。（3）は胸部に丸味をもって張り、口縁部で外反する器形を呈する。口縁部は隆帯による長方形区画がなされ、山形状隆帯・半円状隆帯が交互に貼付されている。地文は繩文である。その他に、頸部を波状貼付文を配し、地文が櫛齒状工具による平行沈線文の深鉢片。半截竹管工具による平行沈線の籠口文の口縁片等も出土している。石器では、凹石と摺石と無頭石棒と思われる先端部が出土している。時期は4号住と同様繩文時代中期末・曾利II式であろう。

#### 6号住居址（第6図 図版6）

5号住居址が発見された田の一枚下段に占地し、西側と南側に搅乱を受けており、穿かれた3ヶの柱穴から約4m程の住居址が推定される。プランは不明である。北寄りの床面から50cm×35cmの範囲に焼土の堆積を認めた。6号住居址に伴う地床がと思われる。

#### 出土遺物（第 15 図 図版 12）

(1) は 4 号住居址から出土した小ぶりの籠目文土器に類似しており、胴部が大きく脛らみ頸部に二本の波状隆筋文が巡る。渦巻状貼付文と蛇行懸垂文が施文され、地文は櫛状工具による平行沈線文である。他に口縁部に隆帯による長方形の区画がなされた地文が縄文の深鉢片は、胴部の上半が強くくびれ口縁部が外反するタイプの深鉢と思われる。無文帯の口縁部が外反するタイプの深鉢の口唇部片で、口唇の内側にめぐる突堤の一部がある。これらは曾利 II 式に比定できる。

#### 7 号住居址（第 6 図 図版 6）

6 号住居址北側の床面を切り、隅丸方形のプランを呈し、規模は約 4.5 m × 4.5 m の住居址と推定される。北壁と東壁の立ち上りは認められるものの西壁の一部を残して殆どが棚田造成によって消失している。南壁は 6 号住を切りわざながら立ち上りが残る。住居址に作う柱穴 6 ヶが穿かれ、6 号住居址に接して 70 cm × 60 cm の楕円形の範囲内に焼土層を検出した。7 号住の地床炉と思われる。

#### 出土遺物（第 15 図 図版 12）

(1) は口縁がラッパ状に大きく外反し、4 単位の X 字状人把手を有する深鉢の把手部分の破片である。曾利 II 式に相当しよう。他に口縁部が隆帯により長方形に区画され地文が縄文の深鉢片。半截竹管工具による連弧状沈線と蛇行隆帯の一部が遺存する深鉢の口縁部の破片。櫛状工具による細かい沈線が胴部に施文され、隆帯の蛇行懸垂文の深鉢片。無文帯の頸部に横位波状隆帯文の深鉢片などがある。年代は縄文時代中期末、曾利 II 式～ III 式であろう。

#### 8 号住居址（第 6・8 図 図版 6）

プランは隅丸方形を呈し、規模は東西 5 m 南北 4.7 m が測られ、壁高は 35 cm ～ 50 cm、壁はやや外反する。床面は平坦で固くはない。住居に伴う施設はなく周溝も認められない。柱穴 9 ヶが規則的に穿かれている。

#### 出土遺物（第 16 図 図版 12）

地文を縄文で施文した土器の小片や沈線文を施文した土器片等が多く、時期を決める資料が少ない中で小片や細片ながら若干時期を推測可能なものを挙げてみる。(1) は櫛状工具による縦の条線文片。(2) は縦の沈線文を施し蛇行隆線が貼付されている。(3) は窓状工具による刺突文を胴部に施文している。(4) は横位隆帯と隆帯区画内に縦方向の沈線文を施したもの。(5) は、沈線による区画内に縦位の沈線を施文したものなど、縄文時代中期末の曾利 II 式～ III 式に相当する遺物が多い。ただ(3) のようにハの字文の破片は曾利 V 式があり、口縁の口唇に刻み目を施し口縁下に指圧痕の隆帯を貼付した加曾利 B 式土器片は、縄文時代後期に位置づけられる。その他に、覆土内から刷目痕が認められる土師質土器片や施釉陶器片等が出土している。

### C 区住居址外の出土遺物

#### 1. 墓葬（第 16 図 図版 6・12・13）

6 号住居址の床面から外れ、住居址の南西部から出土した埋甕(3)である。逆位で出土た。口縁部を欠損し、底部は打ち欠いたように欠損していて平板状の不整形な石が載る大形深鉢である。地文は縄文。頸部に半截竹管による六本の断面が半円形の横位隆線の上下に蛇行隆線を貼付し、胴部の文様も二つに分かれている。上部には 6 本の縦位隆線を口縁に配し下部に 4 本の縦位隆線を垂下させている。現存高は約 72 cm、胴部の径は 45 cm 余である。曾利 II 式である。町内穴<sup>アマニツネ</sup>で発掘した川又南遺跡出土の埋甕群(註 4)は正位で口縁部に河原石がのせられていた。縄文時代中期後半の住居の南側入り口付近から発見された埋甕も口縁、底が欠けているものが多い。住居内の埋甕は、その中にお座に伴う後座(胎盤)や脚の緒を収めたといわれ子供の発育を順々「生」への信仰であり甦りの信仰である。それに対し住居外の埋甕は、埋甕の上に石をのせ壺を封じ込めて死への恐怖からのがれようとする「死」への

訣別を意味するものだろう。他に頭部に半截竹管の工具による 2 本の沈線が巡り、地文はヘラ状工具による刺突文の深鉢片（1）。タタキ石や鋸齒状無茎石鐵（2）などが出土している。

## 2. 石造物（図版 13）

C 区 5 号住居址及び 6 号住居址を発掘した際と南側の黒褐色堆積土を除去した際に出土した五輪塔である（図版 14）。土止めの石垣に利用されていた空風輪・火輪・地輪・のそれぞれ 1 基が出土し、次いで火輪・水輪・地輪の各 1 基が出土した。火輪の辺縁に厚みがあり、軒の反り・上辺・頂点との間隔が短いことから急激に小型化へ移行した室町時代末期のものと判断される。町内大蔵の塚田遺跡（註 5）から出土した五輪塔と同時期のものであろう。

## まとめ

ダイワヴィンテージゴルフ供養部造成工事に伴い調査発掘した上ノ原遺跡の C 区は、平山遺跡とほぼ同じ標高 790m 前後の茅ヶ岳西麓の尾根上にある。この遺構は、尾根南斜面から縄文時代中期後半曾利式 IV から V 式の住居址 18 軒と後期の住居址 120 軒が検出された。（他に掘立柱跡や平安時代から近世に亘る遺構や廻物が検出されている）

上ノ原遺跡の北側に流れる湯戸ノ沢川の尾根上に占地する平山遺跡の調査面積は上ノ原遺跡とほぼ同じ約 24,000m<sup>2</sup> であるのに、検出した住居址は縄文時代中期後半曾利 II 式から III 式が 7 軒と、後期の住居址 1 軒と石鐵工房と思われる遺構 1 である。平山遺跡が所在した机山（平山）の南西斜面と北側斜面には茅ヶ岳火山噴出物である安山岩の巨岩がそここにあり、巨岩の崩落によって形成された小河川が多く走り、緩傾地や平坦地が上ノ原に比較して少ないことが充分な集落を構成する条件にそぐわなかつたのであろうか。石鐵工房跡と考えられる後期の遺構は上ノ原遺跡 C 区の縄文時代後期の大集落跡と湯戸ノ沢を隔てて最も近い位置にある。石鐵供給の地と推測するのは単純すぎるだろうか。

下巻上に人々が戦く応仁の乱中、文明 7 年（1475）の紀年銘が陰刻された月待結集板碑が上ノ原遺跡 C 区西側の仁田平の山裾にある。戦国の乱世を嘆きながらも寒村によって人々の結合組織・祭祀組織が結成、熟成されゆく段階で造立されたものである。これに対し湯戸ノ沢を渡って穂坂路の古道小尾街道が続く平山（机山）の南端の峰に紀年銘は認められないが三尊の種子を梵字で陰刻した板碑が佇む。平山遺跡から出土した住居外の埋設上器（埋甕）の数々が埋め墓と考えられれば、平山遺跡が占地する場所が現世との境であり、そこに佇む板碑が単なる供養塔とは云い難い。

当該地が古代の埋め墓の地と考えれば靈界の入り口に板碑を据え置き、戦後の過疎化が進む以前まで誰で人の絶えなかったという平山中腹に屹立する巨石に祈りを捧げるという妙体石が今も弧座している平山そのものが古代から現代に続く靈地といえないだろうか。

## <参考文献>

- 上ノ原遺跡（1999）上ノ原発掘調査団（註 1）
- 社口遺跡第三次調査報告書（1997）高根町教育委員会、社口遺跡調査団（註 2）
- 甲ッ原遺跡Ⅳ（1998）山梨県教育委員会、山梨県上木部（註 3）
- 川又南遺跡（1986）須玉町教育委員会（註 4）
- 塚田遺跡（1984）須玉町教育委員会（註 5）
- 柳坪遺跡（1986）山梨県教育委員会、日本道路公団
- 山梨県考古学協会誌 第 12 号 集石遺構 小坂隆司
- 尖石考古館図録 茅野市尖石考古館

X 20950  
Y -2360

+ X 21,070  
Y -2,390



石礫帯

集石上坑 3

集石上坑 2

ピット群

上坑 5

上坑 7

下坑 4

上坑 6

集石下坑 1

上坑 3

土坑 2

尖石遺構

土灰 1

堅穴遺構

石列

+ X 21,020  
Y -2,400

第4図 A区全体図

0 (1:400) 20m

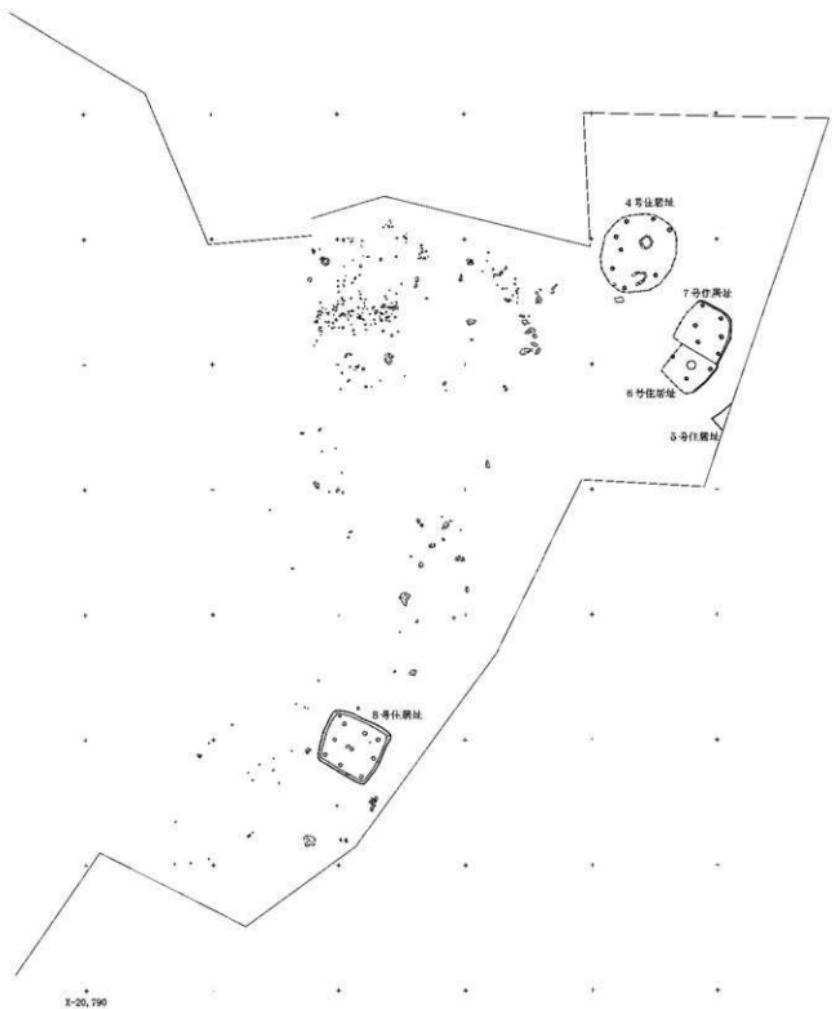
X 20,800  
Y -2,410

X 20,870  
Y -2,410



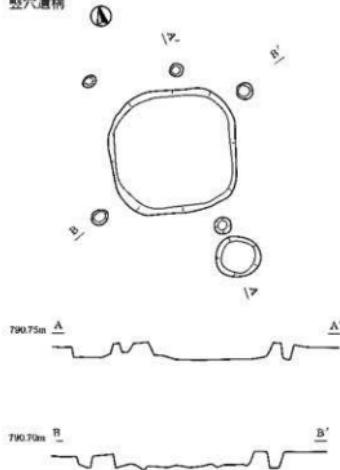
第5図 B区全体図

X-20,700  
Y-2,229

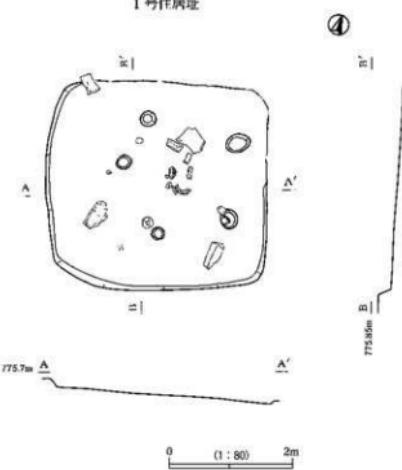


第6図 C区全体図

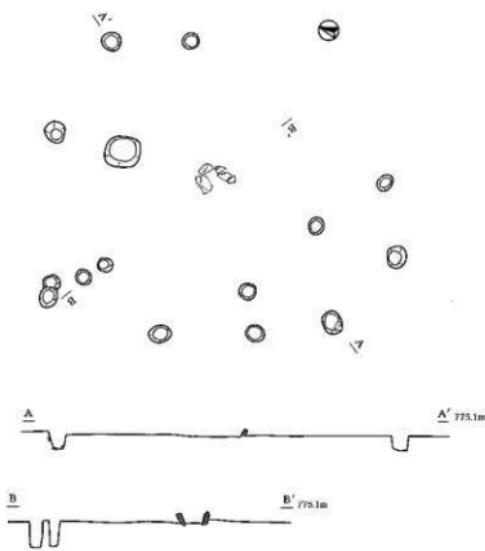
堅穴遺構



1号住居址

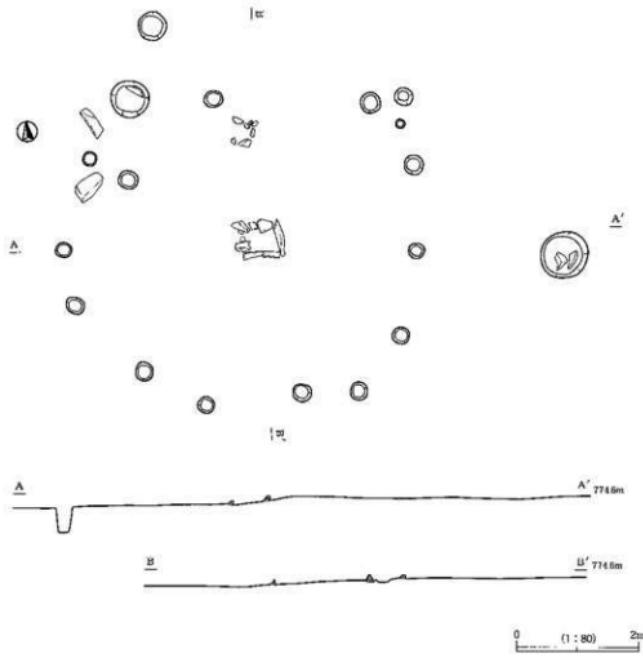


2号住居址

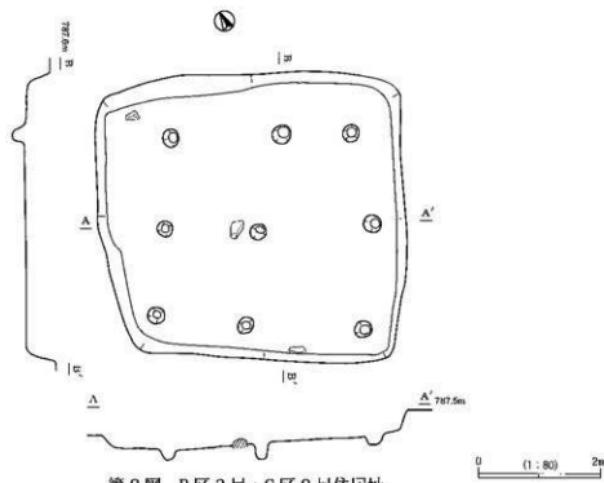


第7図 A区堅穴遺構 B区1号・2号住居址

3号住居址



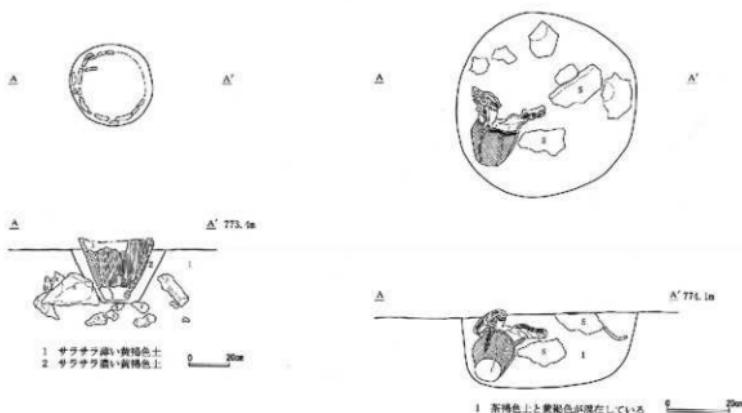
8号住居址



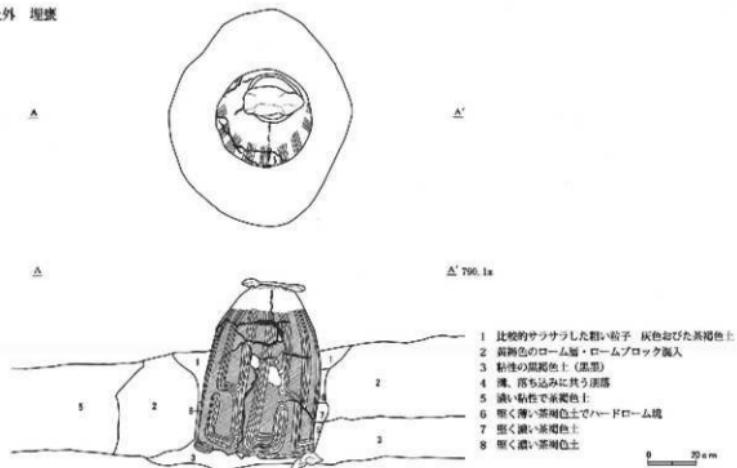
第8図 B区3号・C区8号住居址

B区土坑内出土上器 1

B区土坑内出土土器 2

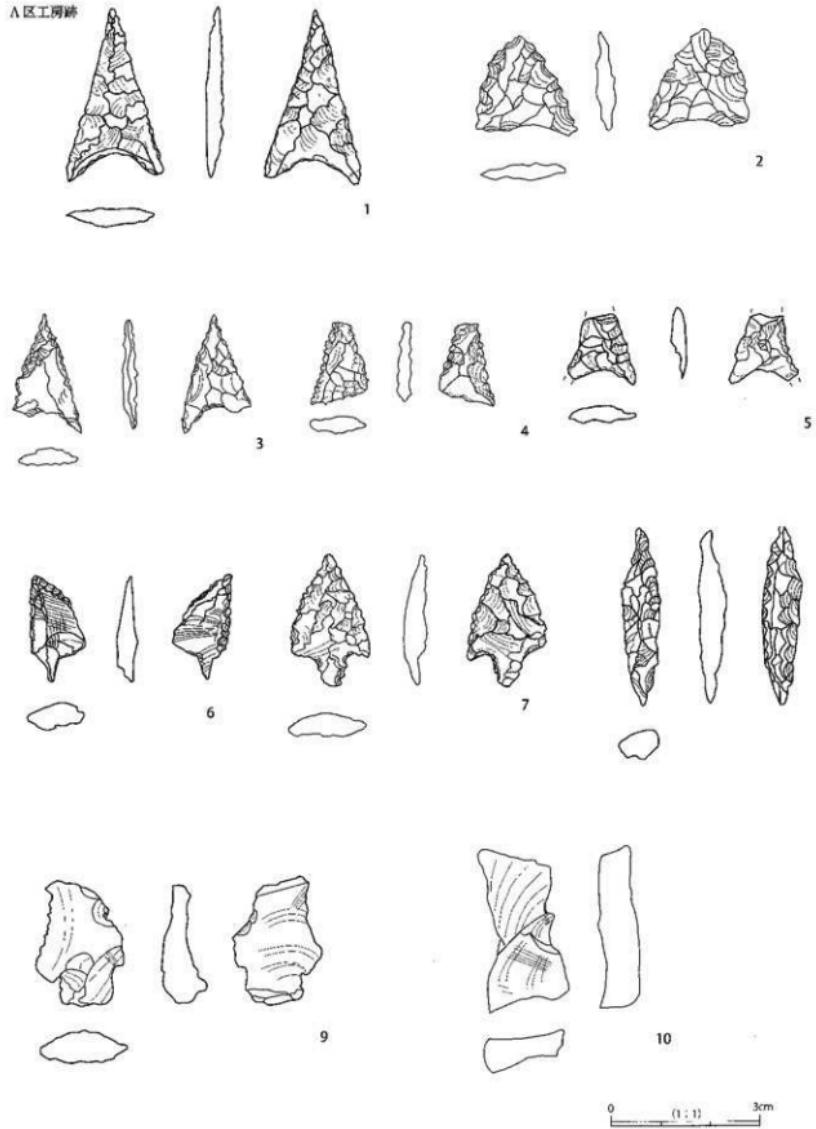


C区住居址外 埋甕



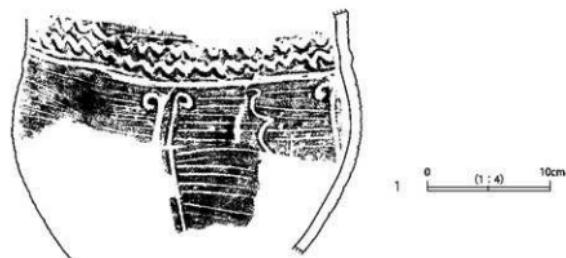
第9図 B区土坑内出土土器・C区住居址外 埋甕

A区工房跡

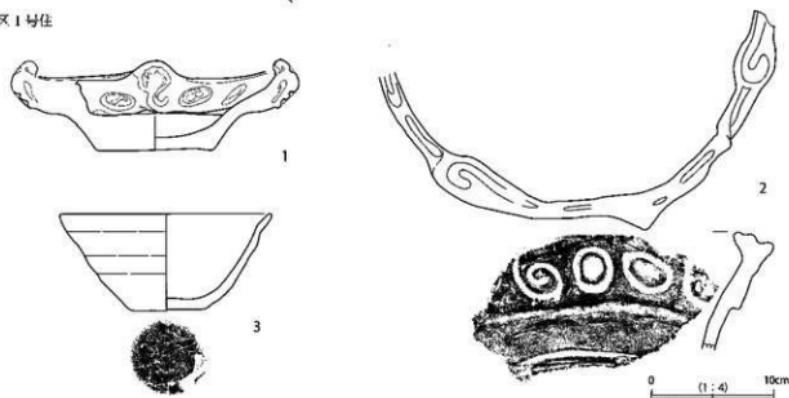


第10図 A区工房跡出土遺物

A区竖穴遗構他



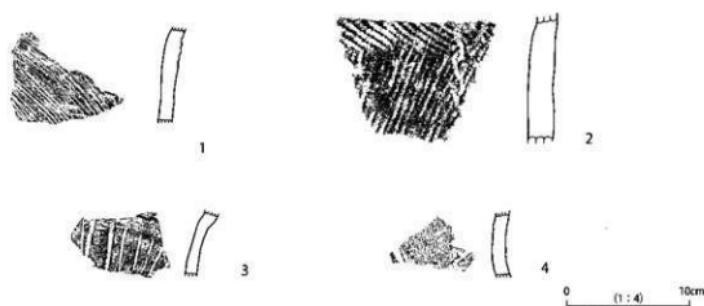
B区 1号住



B区 2号住

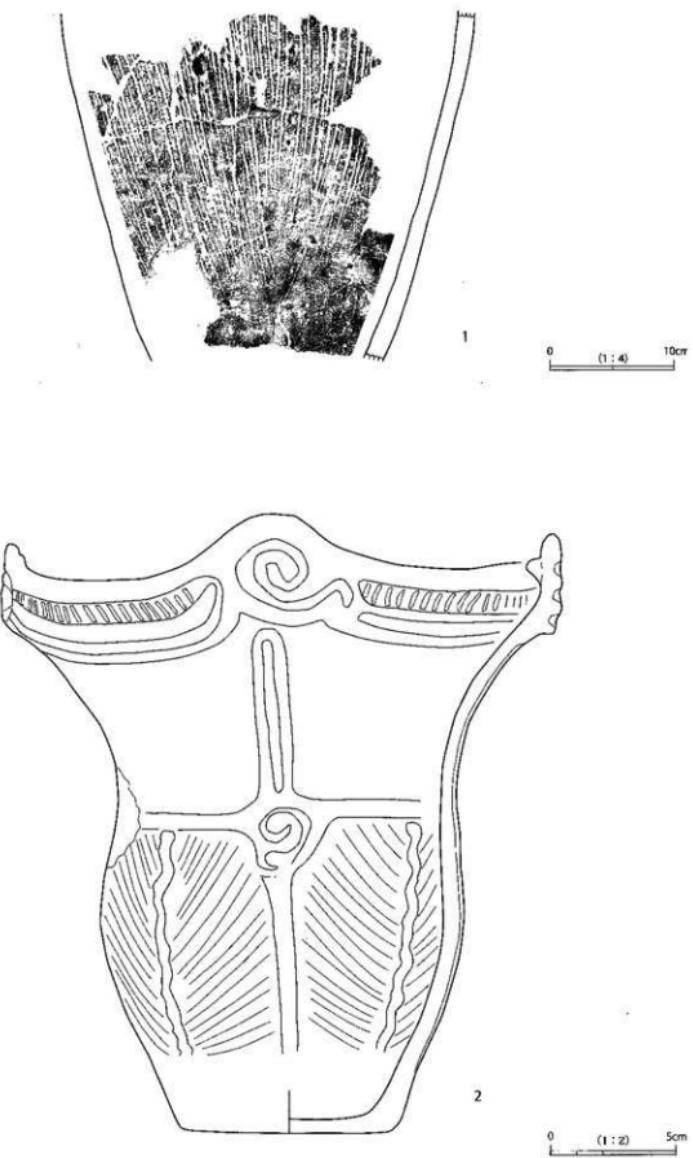


B区 3号住



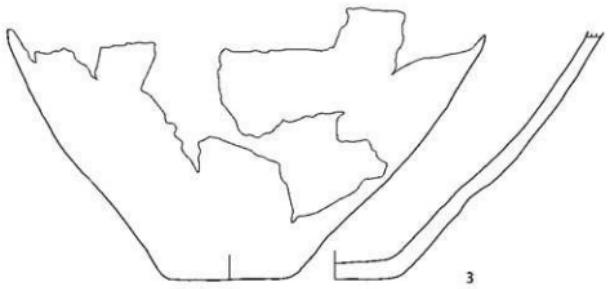
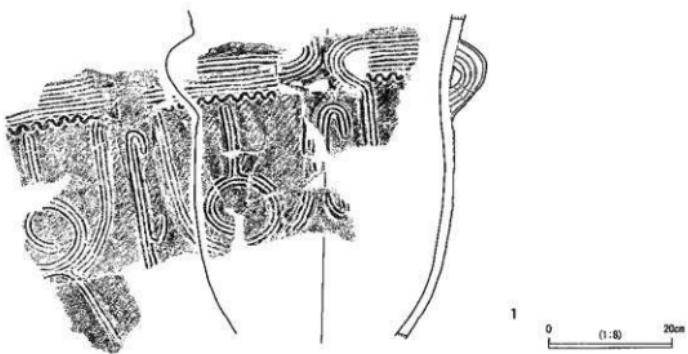
第11圖 A区竖穴遺構他·B区 1号住·2号住居址出土遺物

B区土坑内土器



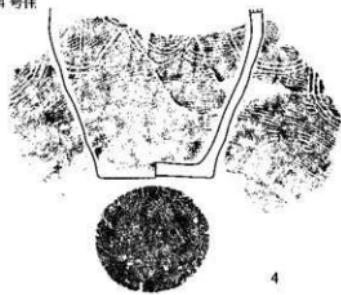
第12図 B区土坑内出土遺物

C区4号住

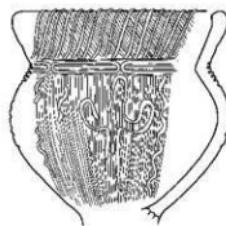


第13図 C区4号住居址出土遺物

C区4号住



4



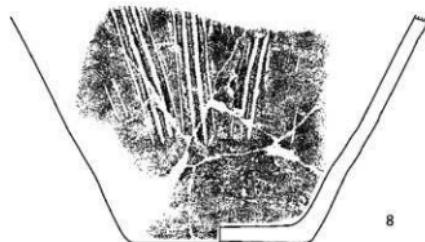
5



6



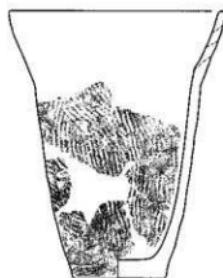
7



8

0 (1 : 4) 10cm

C区5号住

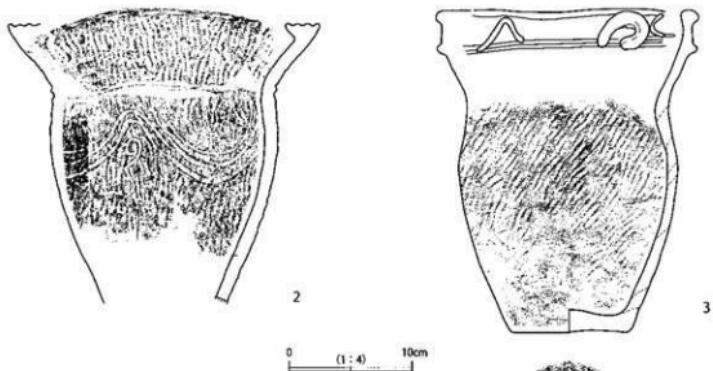


1

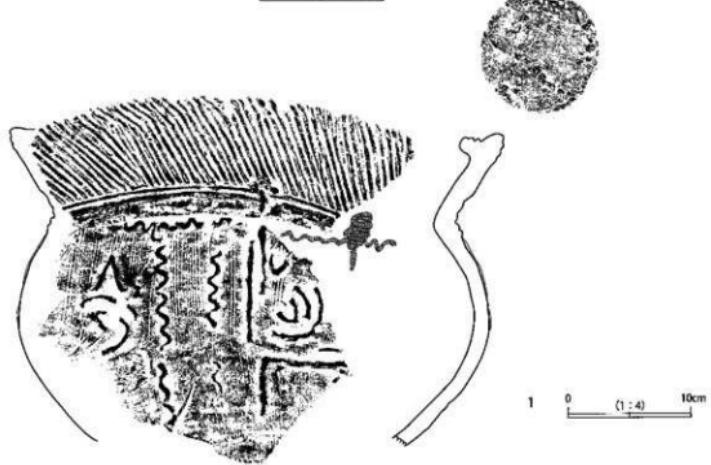
0 (1 : 4) 10cm

第14図 C区4号・5号住居址出土遺物

C区5号住



C区6号住

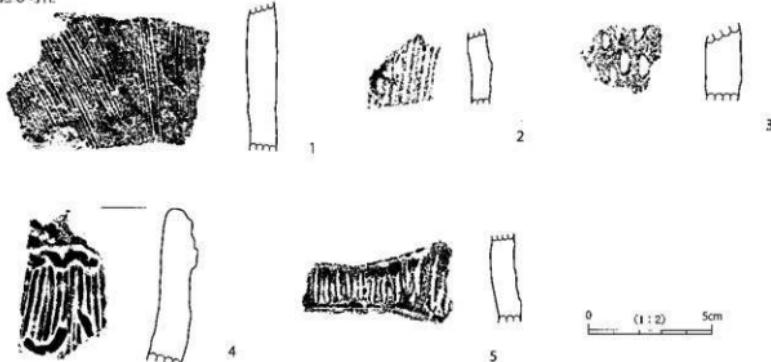


C区7号住

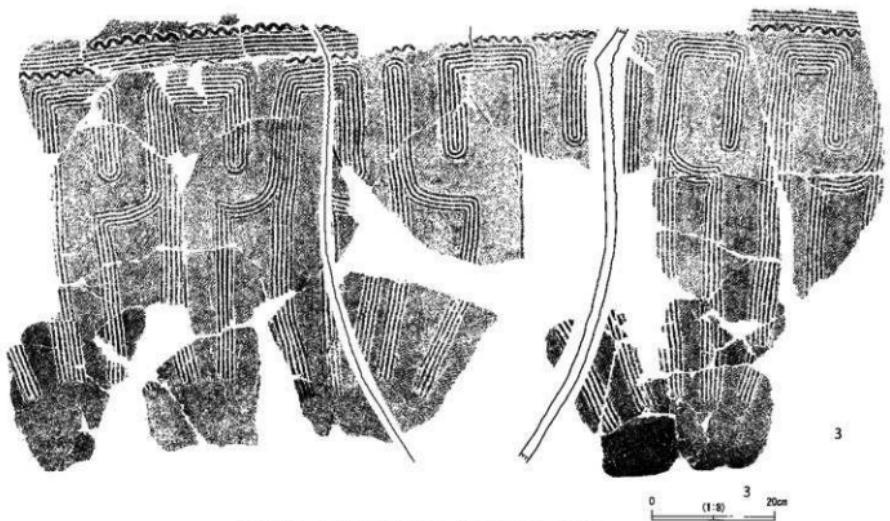
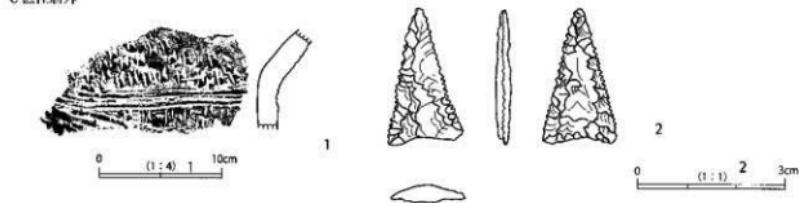


第15図 C区5号・6号・7号住居址出土遺物

C区8号住



C区住居外



第16図 C区8号住居址・住居址外山上遺物

表1 A区～C区上器觀察表

単位 cm  
( ) 内の数値は、推定値

測区	山土地点番号	種類	形態	口径	底径	器高	色調	胎土	鏡形跡文	備考
11	A区盤穴遺物	1 土器	壺	-	-	-	-	-	シダ状沈縞文・平行懸垂文	菅利日式
11	B区1号付	1 土器	深鉢	(20.6)	9.4	7.5	美しい黄褐色	波状口縁部		
11	B区1号付	2 土器	浅鉢	-	-	-	新しい褐色	波状口縁部・円形文		
11	B区1号付	3 土器	鉢	17.3	5.9	7.9	赤褐色	白色粒子多く含む		木葉紋 光形
11	B区2号付	1 土器	深鉢	-	-	-	褐色	当時・白色 粒子	比較による平行懸垂文	
11	B区2号付	2 土器	深鉢	-	-	-	暗褐色	白色粒子多く含む	鏡手文	
11	B区3号付	1 土器	深鉢	-	-	-	褐色	長石・石英・ 雲母	朱塗文	
11	B区3号付	2 土器	深鉢	-	-	-	褐色	長石・白色 粒子	地文縞文	
11	B区3号付	3 土器	深鉢	-	-	-	黒褐色	長石・白色 粒子	沈縞文	
11	B区3号付	4 土器	深鉢	-	-	-	黄褐色	長石・白色 粒子	平行懸垂文	
12	B区往歴外	1 土器	深鉢	-	-	-	褐色	赤色粒子多 く含む	朱縞文の地文	菅利日式
12	B区往歴外	2 土器	深鉢	22.4	8.8	25.2	黄褐色	黒い雲母 含む	鏡形狀の文様を施す	菅利日式
13	C区4号付	1 土器	深鉢	-	-	-	灰褐色	白色粒子多く含む	無文面	X 把手
13	C区4号付	2 土器	深鉢	(28.0)	-	-	褐色	白色粒子を 多く含む	半根竹下呂による平行沈縞	
13	C区4号付	3 土器	浅鉢	-	(18.8)	-	暗赤褐色		無文	
14	C区4号付	4 土器	深鉢	-	(9.2)	-	暗赤褐色		沈縞による墨縞文	木葉紋
14	C区4号付	5 土器	深鉢	(16.6)	-	-	美しい褐色	白色粒子多く含む	商目文・平行胎付文	
14	C区4号付	6 土器	深鉢	-	-	-	茶褐色		羅帶の平行懸垂文	
14	C区4号付	7 土器	手握	7.6	7.0	6.0	褐色		無文	網代窓 把手部斜削
14	C区4号付	8 土器	深鉢	-	(14.6)	-	褐色		竹質無縫文	
14	C区5号付	1 土器	深鉢	17.6	7.6	22.0	赤褐色	白色粒子	地文縞文	
15	C区5号付	2 土器	深鉢	(24.8)	-	-	明褐色		シダ状沈縞文	
15	C区5号付	3 土器	深鉢	20.0	9.6	26.5	赤褐色	白色粒子	胎付文と縞文の地文	菅利日式
15	C区6号付	1 土器	深鉢	39.0	-	-			羅縞文と平行沈縞文	菅利日式
15	C区7号付	1 土器	深鉢	-	-	-	美しい褐色	白色粒子	尾形博文・竹葉条縞・地文縞文・ 平行胎付文	X 把手菅利日式
16	C区8号付	1 土器	深鉢	-	-	-	暗灰色		朱縞文	
16	C区8号付	2 土器	深鉢	-	-	-	美しい褐色	当時含む	平行懸垂が胎付	
16	C区8号付	3 土器	深鉢	-	-	-	美しい褐色	白色粒子多く含む	ハの字文	
16	C区8号付	4 土器	深鉢	-	-	-	赤褐色	黒かい白色 粒子	萬葉区画に沈縞文	
16	C区8号付	5 土器	深鉢	-	-	-	褐色	白色粒子	医胸内に藏文の沈縞文	
16	C区往歴外	1 土器	深鉢	-	-	-	黒褐色		刺突文	
16	C区往歴外	3 土器	深鉢	(51.0)	(18.5)	(71.0)	暗赤褐色	白色粒子を 多く含む	陽帯文・地文縞文	菅利日式

表2 A区～C区石器觀察表

単位cm  
( )内の数字は、推定値

序号	出土地点	遺物番号	分類	長さ	幅	厚み	重量	石材	備考
10	A区工場跡	1	石器	3.6	1.8	0.3	1.5g	黒曜石	無葉
10	A区工場跡	2	石器	2.1	1.7	0.4	(1.2g)	黒曜石	一部欠 無葉
10	A区工場跡	3	石器	2.4	1.2	0.3	(0.5g)	黒曜石	一部欠 無葉
10	A区工場跡	4	石器	(1.8)	1.2	0.2	(0.5g)	黒曜石	先端、片側欠 無葉
10	A区工場跡	5	石器	1.5	1.4	0.3	(0.5g)	黒曜石	先端、片側欠 無葉
10	A区工場跡	6	石器	2.2	1.3	0.4	0.5g	黒曜石	有葉
10	A区工場跡	7	石器	2.6	1.4	0.4	(1.2g)	黒曜石	一部欠 有葉
10	A区工場跡	8	石器	3.6	0.8	0.5	1.2g	黒曜石	
10	A区工場跡	9	剥片石器	2.6	1.3	0.6	2.5g	黒曜石	ナイフ形
10	A区工場跡	10	剥片石器	3.5	1.6	0.8	4.5g	黒曜石	
16	C区保育園外	2	石器	2.7	1.5	0.3	(0.8g)	チャート	一部欠 遷偏

## 写真図版

図版 1

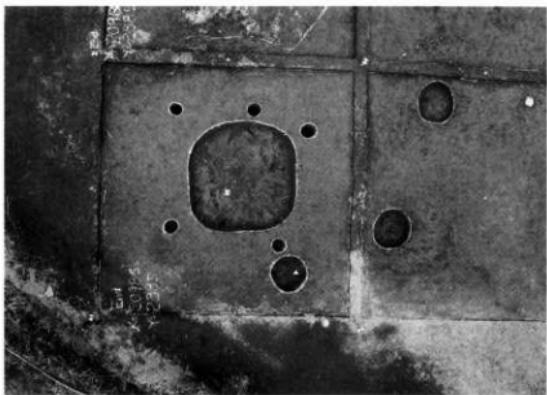


A区全体（左）B区全体（中）C区全体（下）





A区工房跡

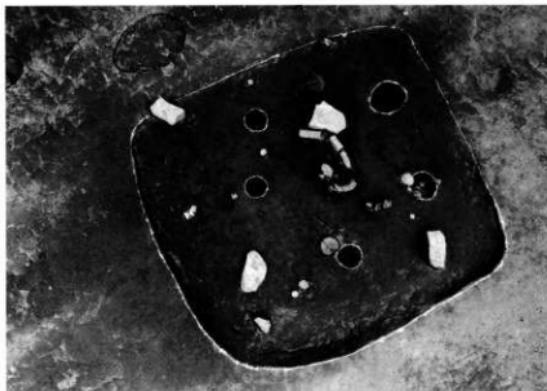


A区整穴遺構



A区石列遺構

図版3



B区1号住居址



B区屋外集石炉



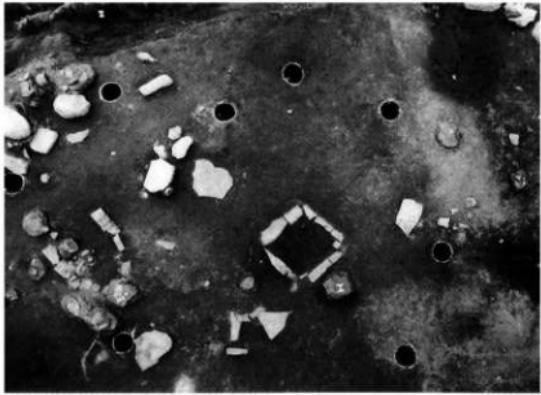
B区3号住居址脇より石圓炉



B区土坑内出土土器 1



B区土坑内出土土器 2



C区 4号住居址

図版 5



C 区 4 号住居址より  
土器出土



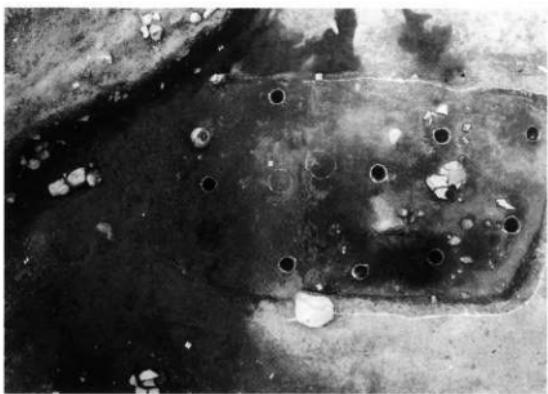
C 区 5 号住居址



C 区 5 号住居址より土器出土

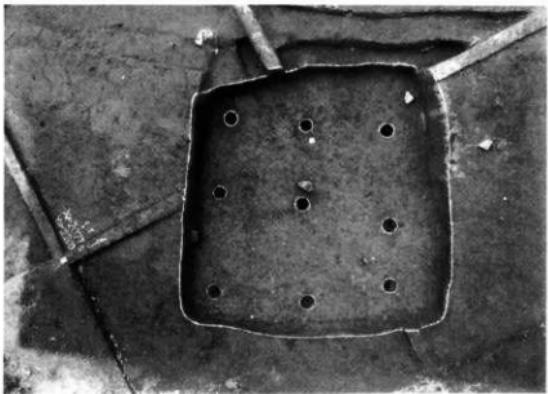


C区住居外より埋甕出土



C区 6号住居址（左）

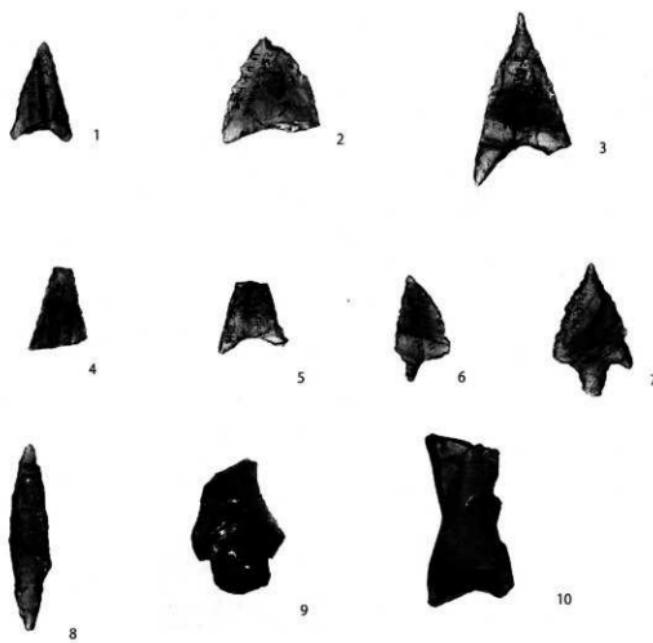
C区 7号住居址（右）



C区 8号住居址

図版 7

A 区工房跡



豎穴造構



A 区工房跡・豎穴造構出土遺物

1

図版 8

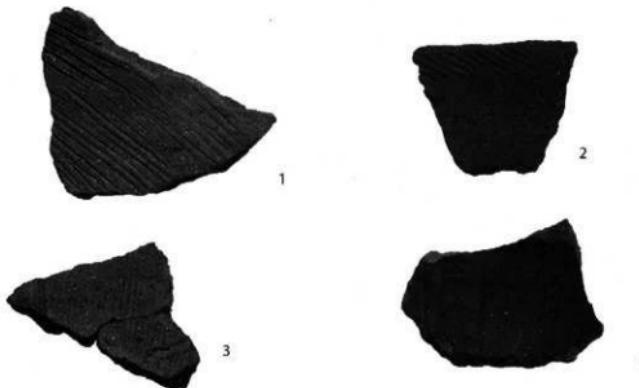
B区 1号住



B区 2号住



B区 3号住



B区 1号～3号住居址出土遺物

図版9

B区土坑内



1



2

B区土坑内出土遺物

C 区 4 号住



1



2



3

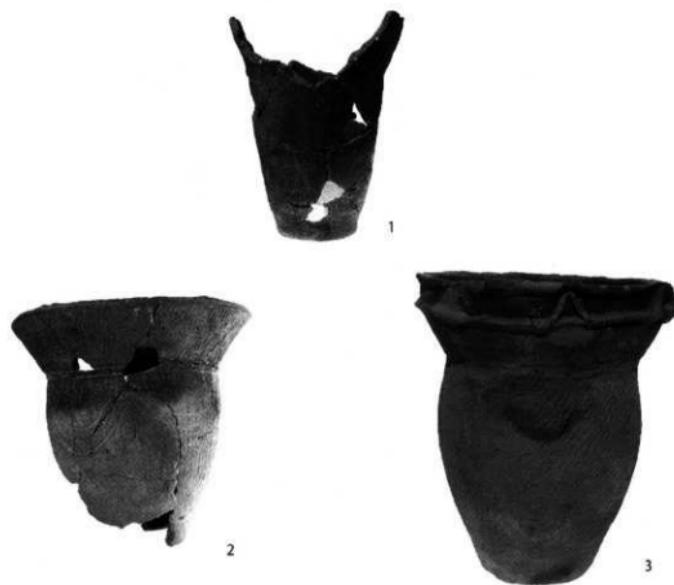
C 区 4 号住居址出土遗物

图版 11

C 区 4 号住



C 区 5 号住



C 区 4 号・5 号住居址出土遺物

图版 12

C 区 6 号住



C 区 7 号住



C 区 8 号住



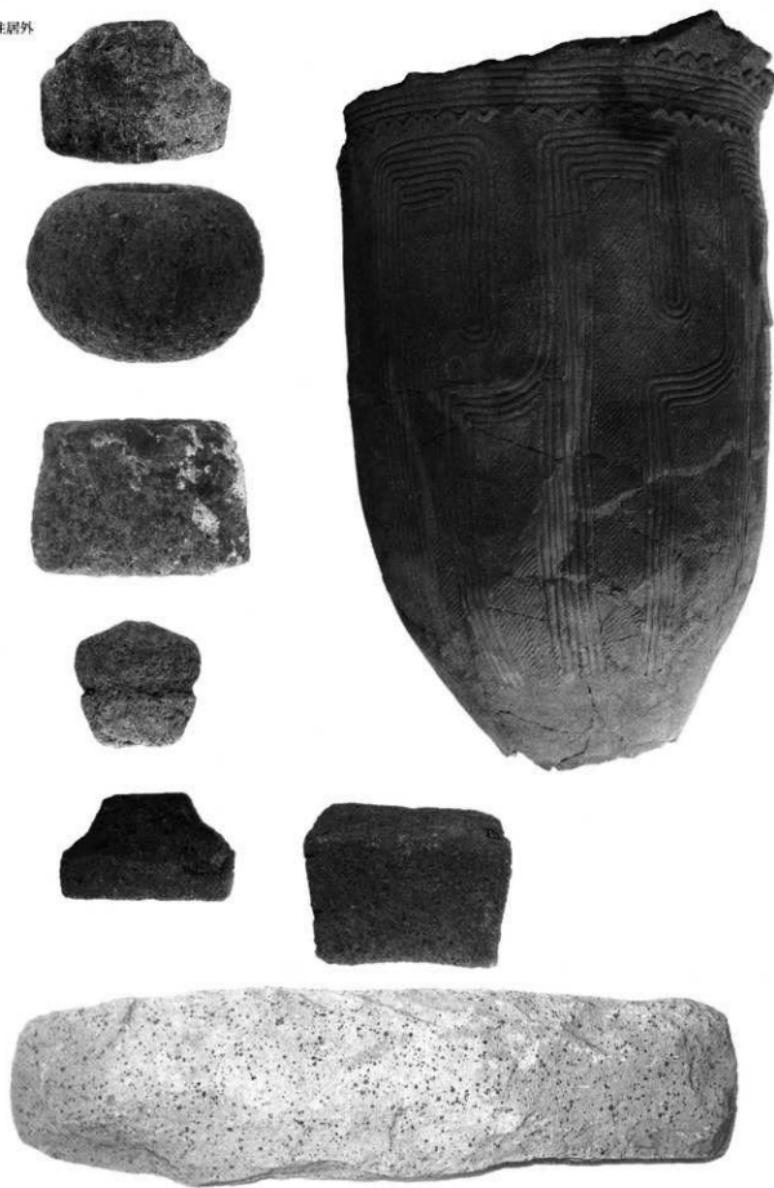
C 区住居外



C 区 7 号·8 号住居址·住居址外出土遗物

图版 13

C 区住居外



C 区住居址外出土遗物

## 報告書抄録

ふりがな	ひらやまいせき
書名	半山遺跡
副題	山梨空き整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
ジリーズ	-
編著者名	山路恭之助 深沢裕三
発行者	須玉町教育委員会
編集機関	須玉町教育委員会
所在地・電話	〒408-0112 山梨県北巨摩郡須玉町若神子 1429 TEL 0551-20-6111
発行日	平成15年3月31日
遺跡所在地	山梨県北巨摩郡須玉町江草 5921 番地他
	25,000分の1地形図 若神子
	位置 東経 138° 28' 30" 北緯 35° 46' 3" 標高 800m
	町村コード 194034
調査原因	山梨空き整備事業に伴う発掘調査
調査期間	平成14年2月21日～11月1日
調査機関	須玉町教育委員会
調査面積	24,000m <sup>2</sup>
時期	縄文時代
主な遺構	住居、石圓炉、竪穴遺構、溝、屋外集石炉
主な遺物	石器、縄文土器
特記事項	

印刷仕様

紙 質 表 紙 テンカラーねずみ 175Kg  
本 文 コート紙 70.5Kg  
D T P Macintosh Adobe InDesign2.0  
使用フォント 小塙明朝、小塙ゴシックを使用  
画像原稿 階調画像線数はカラー 175 線、モノクロ 133 線

---

平山遺跡

HIRAYAMA SITE

田園空間整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 15 年 3 月 31 日発行

編 集 須玉町教育委員会

発 行 須玉町教育委員会

印 刷 有限会社 高速プリント

---

